

2023年1月31日

2022年度聖路加国際大学大学院
看護学研究科課題研究

神経性やせ症患者の心理的要因と看護介入に関する文献検討

-リエゾン精神看護専門看護師の役割についての考察-

A Literature Review on Psychological Factors and
Nursing Interventions for Patients with Anorexia Nervosa
A Role of Psychiatric Liaison Nurse Specialists

20MN027

宮原 慶江

要旨

目的：神経性やせ症患者が増えるなか、患者の身体管理や心理的支援が必要であるが、特に心理的要因に焦点を当てた看護介入について明らかにされていない。神経性やせ症患者の心理的要因と看護介入のつながりを明らかにし、リエゾン精神看護専門看護師として支援への示唆を見出すことを目的とした。

方法：神経性やせ症、看護をキーワードに電子データベースによる文献検索を行い、和文献7件英文献2件を対象とした。テーマ分析を用い心理的要因の『アセスメント』、『看護介入』、『結果・評価』に関する記述を抽出し、サブカテゴリ、テーマに整理した。

結果：心理的要因の『アセスメント』として看護師は、本人が【体型評価へのとらわれや肥満恐怖心がある】ことにより【体型や治療に対して両価的な思いを抱く】ことや、【周囲から見放されたと感じる経験を持つ】ことから引き起こされる【医療者から見捨てられる不安を抱く】状態を把握していた。また【家族が問題から目をそらし患者と向き合えない】で【家族が患者へ拒否的な感情を抱き対処方法に苦悩する】様子をアセスメントしており、これらの『アセスメント』をしながら介入が行われていた。『看護介入』として看護師は、【客観的データを用いて説明し、治療への動機づけを支える】【患者の行動計画のもと一貫した対応で長期的に支える】という治療的な介入や、【思いに寄り添い否定しない態度で受け入れ】ており、患者に対する看護師の基本的な姿勢として【感情の揺れ動きを自覚し安定した姿勢で介入】していた。また家族への介入として【家族関係を再構築し治療体制を整える】支援を提供していた。看護介入の『結果・評価』として【自己洞察にて自己の現状を受容できる】という患者に対する教育的なかかわりによって起こる変容、【安心感を抱き意欲的に治療を継続できる】や【安心して過去の経験や思いを話すことができる】といった看護介入の結果により信頼関係構築が得られて起こる変容、【家族が積極的に患者を支えることができる】といった家族の変容が見出された。【体重増加による不安な思いや目標達成できない焦りを抱く】に示すように患者は不安や焦りを抱いており、再アセスメントと介入を繰り返すことで自己洞察や安心感などの変容につながっていた。リエゾン精神看護専門看護師としては、長期的な介入の見通しを立てながら多職種の間で「調整」の役割を担い、医療スタッフ自身が方向性を見失わないよう「教育」として第三者の立場でスタッフの抱く感情を理解し支援する役割が期待されていると考える。

結論：神経性やせ症患者に対する看護では、疾患の背景となる個人・環境的要因を繰り返しアセスメントし患者・家族に合わせた介入を行っていた。患者は変容することへの葛藤を抱きながら治療に向き合っており、看護師はその気持ちを理解しながら安定した姿勢で対応する役割を持つことが明らかとなった。